

## ホッブズの生涯とその時代

吉田 達志

人文社会教室

(1986年9月5日受理)

Thomas Hobbes : his Life and Times

Tatsushi YOSHIDA

Department of Humanities

(Received September 5, 1986)

The names of three English thinkers stand out before all others in the seventeenth century—Bacon, Hobbes, and Locke. Bacon died in 1626 ; Locke did not come forward with his 'Essay' till 1690. Nearly the whole interval is spanned by the activity of Hobbes. Approaching his fortieth year when Bacon died, he was then just embarking on his philosophical career. He was still at work more than fifty years later, and his writings had not all appeared until 1688, well after his death in 1679. Nor did he cease to influence men's thoughts long after Locke had given them a new direction.

The aim of this paper is to seek some understanding of the full range of Hobbes' manifold and prolonged activity as a thinker in relation to the circumstances in which he lived and moved.

一七世紀におけるイギリスの思想家の中で、他に傑出した思想家としてベーコン (Bacon), ホッブズ (Hobbes), ロック (Locke) の三人の名を挙げることができようが、別けても最も際立っているのはホッブズである。彼は四〇歳に近い頃、その哲学者としての経歴を開始したが、それから五〇年経ってもなお、哲学者としての活動を止めなかった。彼の著作のすべてが刊行されたのは、実に死後の一六八八年のことであった。その思想的影響力は、遠く今日にまで及んでいる。けれども、当時において彼は、いわば新思想家であって、新しい革袋に新しい酒を盛ろうとしたために、多くの旧思想家の反撃と批判を招いてしまったのである。

この小論は、ささやかではあるが、ホッブズについての伝記とでも言うべきものである。この中で私は、彼の人物となりや浮彫にしようとするだけでなく、特にこの時代の論争家と旧思想家との対決の有様をも描き出すことによって、その思想形成と確立に伴う困難と苦渋の跡をも辿ろうとした。なぜならば、そこにこそ時代の思想的風土というものが、顔を覗かせているように思われたからである。

### 1. 学問的世界への接近

哲学者トーマス・ホッブズは、一五八八年四月五日に生まれた。実はこの年には、スペイン艦隊の脅威がイギリス本土に重くのしかかっていた。そのために、ウィル

トシャー (Wiltshire) のマームズベリ (Malmesbury) の近くのウェストポート (Westport) とチャールトン (Charlton) における英国教会の教区牧師であったトーマス・ホッブズ (父と子は同名) の妻が、第二番目の息子を月足らずで生んだのであった。こうして、ずっと後にホッブズがその自伝の中で語っているように、彼と恐怖心とは双生児として生まれてきたのであった。彼の家族は父、母、兄、彼、それに姉又は妹の計五人から成っていた。彼の天宮の星位は牡牛座であって、七つの惑星のうち五つを含む衛星群がその中にあった。衛星群を自分の星位に持って生まれた人は、その一生において常人よりも名を顯すというのが占星術の金言である。彼は恐を知らない知力の持主であり、その点完膚なきまでに男性的であって、「天才の世紀」に生を享けるのにふさわしい人であった。

ウェストポートにおける父トーマスの経歴は、彼が教会の戸口である人 (この人は次の牧師になったが) に拳骨を見舞った時に終を告げた。その後、その行為のために逃亡しなければならなくなってしまい、やがてロンドンの向うで死んだらしい。父トーマスは、あのエリザベス女王治世下でよく見られた無学な「サー・ジョン」の類であって、教会の祈禱や法話しか読めず、長男エドモンド (Edmund) が語っているように、学問の甘味を知らないが故に学問を軽視していた。母の結婚前の姓はミドルトン (Middleton) であって、ブロークンバラ (Brokenborough) におけるヨーマンの家の出であった。

手袋製造人であった叔父のフランシス (Francis) は気がよく、トーマス少年の教育のために金を払ってくれた。また、ロバート・ラティマー (Robert Latimer) から教を受けるという幸運も得た。この人は優れたギリシア語学者であって、宗教改革以後初めて彼の地にやってきたギリシア語学者であった。

立派な教育を受けたので、ホップズは14歳の時オックスフォードのモードリン学寮 (Magdalen-hall) に進学し、五年間かかって文学士の称号を取得した。もっとも晩年の彼の言によると、彼は当時、大学で教えられていた論理学とスコラ学的自然学とを余り高くは評価しなかったという。そして、書店で地図に見入って時を過ごしたという。

学寮の寮長であったジョン・ハッシー (Dr John Hussee) は、ウィリアム・キャヴェンディッシュ (William Cavendish)、即ち、ハードウィック男爵 (Baron Hardwick)、後の初代デヴォンシャー伯爵 (Earl of Devonshire) にホップズを彼の息子の家庭教師として推薦した。こうして、彼の一生を通じて保たれたデヴォンシャー家との関係が始まった。この関係がなかったならば、おそらく後年の彼はなかったであろう。デヴォンシャー家には立派な図書室が備えられていたから、学問を自由に研究することができたのである。更にそれ以上の利点があった。つまり、外国旅行、思索するための余暇、政治家のみならず文人、科学者との絶えざる交際といった事柄があって、それらは、彼が自らの真価を示す上でよい切掛を作ってくれたのであった。政治の分野に関しては、彼は、王党派の開明的なジェントリー達がどのように考えるものなのかということの内側から知ったし、新しい科学の分野に関しては、彼が出入りを許されたキャヴェンディッシュ家の分家を通じて知った。そこにはニューカッスル伯ウィリアム (William, Earl of Newcastle) とその弟チャールズ・キャヴェンディッシュ (Charles Cavendish) がいて、前者は新しい科学の動きに生々とした関心を寄せていたし、後者はその動きを熟知していたのである。

ホップズは背が高く、繊細な感じを人に与えたが、明らかく燃えている石炭のように輝くばかりの薄茶色の目をしていたし、血色は悪いが立派な顔つきをしていた。家庭教師になった最初の頃、彼はその若主人 (彼と同年代であった) の侍者として多くの不愉快な用事を言いつけられた。彼は、弟子が自分で金を借りるのを恥じているので、代って金を借りようとして歩き回り、その際、雨に濡れるのも我慢した。彼は何度も風邪をひいたが、腹を立てなかったし、隙間風の入る控の間で待っている間、シーザーや他の古代の著作家達の作品のポケット版を読んで、古典についての知識を忘れないように努めた。

彼は一六一〇年 (アンリ四世 (Henri IV) が暗殺された年)、その弟子と共に外国旅行に出かけ、フランスとイタリアを訪れてそれらの国々の言葉にかなり習熟したし、モードリン学寮の論理学と哲学は、学問の進んだヨーロッパでは取るに足りないものだとすることを発見した。

イングランドに戻ってからは、彼は古典の研究を続け、刻苦して読む者に感動を与えるラテン語と英語の文体を確立した。一六二八年か一六二九年頃に至るまで長期にわたって修業が続けられ、遂に彼は、ツキディデスの歴史書の翻訳を出版した。後年彼は、この頃にあれだけ多くの物語や戯曲に読み耽ったことを無駄なことだったと悔んだが、オーブリー (Aubrey) が指摘したように、それが彼の語彙を著しく豊かなものにしたのだから幸運であったと見るべきであろう。

ツキディデスの著作の翻訳は、マキャヴェリの著作『リヴィウス論』に匹敵する、一種の哲学的踏査の試だと見なしてよかろう。彼自身は四〇年後に、それをイングランドの市民にアテナイ民主政治の愚さを納得させるために書いたと述べている。また、ある著作の中で彼は、それを貴族や政治的に重要な仕事に携っている人々への教師として論述しようとしたと書いている。「歴史家の仕事は、どこに名譽と不名譽が見出されるかを示すことにある。この二つのものは、現代においてはひどく取違えられてしまっている。ツキディデスは、民主政とデマゴグの野心を憎悪した。彼は実際、王政をよしとした。また、彼は、民衆の信奉する馬鹿げた宗教に賛成しなかったという理由で、誤って無神論者だと見なされてしまった。更に、アテナイにおいては政治家を除いて、他に貧しい者は一人もいなかった。アテナイ人は皆、面白そうな事件を聞いたり、伝えたりすることだけに時を費した。ここに、職業として成立していない政治屋というものの本当の性格が見られるのである。」

ところで、フランシス・ベイコンが亡くなったのは一六二六年であるが、その晩年の頃ホップズは彼の秘書として仕え、優れた能力を認められた。オーブリーによると、大法官は彼と言葉を交えるのを大層好んだ。彼は、卿が自分の『隨筆集』の教篇をラテン語に翻訳する手伝をした。また、ベイコンは大いに黙想に耽る方であり、よくゴラムベリー (Gorhambury) の美しい散歩道で沈思して、インクと紙を携えた侍者に考えたことを口述してはその場で書き取らせた。ベイコン自身の言によると、彼の考えを書き留めるのに他の誰にもましてホップズが気に入っているというのである。その理由は、ホップズは書いたことを理解しているが、他の者達はそれを理解していないので、彼らが書いたものを判読するのに再三大骨折をする点にある、ということだそうである。

初代デヴォンシャー伯爵は一六二六年に亡くなり、次いで一六二八年には第二代伯爵も財政状態を窮迫させたままで逝ってしまったので、彼は解雇されてしまった。そのために気分が幾分打ち沈んだが、彼は、サー・ジャーズ・クリントン (Sir Gervase Clinton) の子息の大連旅行に随伴する仕事を引き受け、パリ、オルレアン、それにおそらくヴェニスへ行った。注目すべきことは、彼がこの頃初めて幾何学を知ったことである。オーブリーによると、ある紳士の図書室にいた時、そこにユークリッドの『幾何学原本』が開けてあった。それは第一巻、四七番の命題であった。彼はその命題を読んだ。「いや、こんなはずはない」と言った。そこでその証明を読むと、それが別の命題を参照していた。それを読むと、また別の命題を参照していてそれも読む。このように次々と進んでいった挙句、最初の命題の正しさを証明によって納得させられた。これが契機となって彼は幾何学を愛するようになった。「ホップズ氏はベッドにいて、シーツや自分の腿に線を引いたり、掛算、割算をしたものだと言っているのを聞いたことがある」と、オーブリーは書き留めている。

一六三〇年一月、再びデヴォンシャー家に仕えるために彼は戻ってきた。そして七年間、次の伯爵になる人にラテン語、修辞学、その他の科目を熱心に教えた。同時に彼自身の研究もどんどん進めていった。

新しい弟子を伴って彼は、第三回目の大陸旅行に出かけた。その時彼は、運動の問題、即ち、運動と新しい自然学との関係、特に我々の感覚との関係という問題に取りつかれてしまった。船に乗っていても、馬に揺られていても、道を歩いていても、彼はこの問題を熟考した。そして、パリ滞在中にこれ以上は望めないほどの助力を得て、哲学体系を構築し始めた。というのは、彼はフランス派の修道士メルセンヌ (Mersenne) の友人となったが、メルセンヌの居家は正にあらゆる学問の渦といった趣があって、そこは最新の思想で溢れていたからである。この頃彼は、自分の思索の結果をメルセンヌに週一、二度知らせていたらしい。更に彼は、一六三六年頃に偉大な科学者ガリレオ (Galileo) を訪問した。そして、一六三七年イングランドに戻ってきた時には、彼は、自らの哲学体系を物体、人間、市民の三つに大きく区分して正しく配列するという作業の準備が整ったと確信していた。

もしも、ホップズの論文『小論文』(Short Tract) が早くも一六三〇年には書かれていたとするならば、彼が既にこの年に、後年の体系の多くを前もって論じていたということは明らかであろう。もっとも、後になって放棄することになるのではあるが、当時まだ彼は、あるスコラ学的諸見解を保持していた。科学に対する彼の関心、

抱負、評価は明白である。一六三三年、彼はニューカッスル侯のためにガリレオの『天文対話』の写を買おうとしたが、金が足りなくて手に入れることができなかった。彼自身も述べている。「私が学問研究から得る極度の喜びは、他のすべての欲求を圧倒してしまう。」

## 2. パリにおける学問の進展

ホップズの最初の哲学的著作は『法学要綱』(Elements of Law) であって、それは既に一六四〇年に原稿のままに回覧されていたが、物体についてはほとんど言及されていない。その代り、人間とその市民たる資格について論じられている。ある意味で、この作品はその時代のために書かれた小冊子である。もっとも、そこで主張されている「絶対主義」(absolutism) は、心理学、倫理学、政治学の永続的な原理に基礎づけられていると明言されているのではあるが。実際、この作品はチャッツワース (Chatsworth) ないしはウェルベック (Welbeck) における討論の中から誕生したと推定してよいであろう。ここに集ったフォークランド (Falkland) やその他の教養のある貴族達は、ピューリタンやアルミニウス派の人々とは交際しなかったし、また、諸都市の増大する富に不信の念を抱いていた。教養があり、好んで理性的にものと考えようとする傾向があるにもかかわらず、伝統と身分の故に彼らは、全面的には是認することのできない党派とも手を結ぼうとしたり、或いは理解することのできない党派には敵対したりするという余儀なくされた。彼らの知的な気風の印は、ニューカッスル侯の性格についてクラレンドン (Clarendon) が行った説明の中に見出すことができよう。「侯は、自分自身の偉大さの基礎をなすものとして君主政を愛したし、王冠の栄光と安全のために設立されたものとして教会を愛した。そして、その両者に必要な秩序と服従を育み、維持するものとして宗教を愛した。侯は、公共の平和を妨げるようなものは皆、ひどく嫌った。」

この時代においては、政治理論の重要な眼目は、人が翼を持っている場合にのみそこに到達することのできる、雲間に聳える高い峰のようなものになることにあるというよりも、実効的な力をもった、槍の穂先のようなものになることにあると考えられていた。たとえば、ヘンリー・パーカー (Henry Parker) の『観察』(Observations) は、一六四二年に出版されたもののうちでは最も有力な政治的パンフレットであった。自著出版後、ホップズは、長期議会が自分をどのように遇するかに不安を感じ、その結果、フランスに渡った。彼は亡命者第一号となったのであった。そして結局、彼の地に一年間留まることになった。亡命によって、彼は数千ポンドとい

う大金の損害を被った。この行動は通例、彼のはなはだしい臆病の表れと見なされているが、おそらくその通りであろう。

しかしながら、ホッブズが既に五〇歳の年齢に達していたこと、包括的な哲学体系の形成に磨をかけようと決意していたこと、メルセンヌやその他の学問のある友人達から歓迎されると確信していたこと、更に、優れた会話をしないという人間の知力には微が生えてしまうと確信していたことが想起されるべきであろう。もしも、血を流されるということではなく、ロンドン塔に幽閉されて頭に微が生えてしまうということが彼の恐れねばならなかったことだとするならば（というのは一六四〇年には戦争は始まってはいなかったし、始まっていたとしても、年の行った学者が従軍させられるということはありませんであったであろうから）、彼が、狂暴な新しい議会の下におけるイングランドよりもパリの方を好ましい場所だと断定してもなんの不思議もないであろう。三年前のパリにおいてこそ彼の哲学は進展をみたのだし、諸科学の偉大なパトロンであるリシュリュー (Richelieu) も依然として健在だったのである。それに、ホッブズのパトロン（今や彼の弟子というよりは主人であった）が、自らの身分故に恐れ戦いていたという事情も考慮しなければならぬであろう。

パリでは彼は、メルセンヌの支援を得て哲学の指導者として迎えられたし、特にデカルト (Descartes) に対しては己の自主性をしきりに主張しようとした。差当り政治理論と形而上理論の形成を平行させて進めていたが、一六四二年、世界的に有名になった著作『市民論』(De Cive) が小さな版で公にされた。この政治論文が完成したので、彼は自然哲学の研究に立戻っていった。彼の言によると、彼は、この頃の四年間を『物体論』(De Corpore) と呼ばれることになる著作の推敲に費したという。彼の友人ソルビエール (Sorbiere) は、一六四六年、彼宛に『全哲学要綱』(Elements of all Philosophy) の出版を熱烈に期待している旨の手紙を書いている。彼自身も一六四七年の手紙の中で、病気に罹らなかったならば、自らの哲学の第一部、即ち、物体についての議論を完成させていたであろうと述べている。一六四四年一月、チャールズ・キャヴェンディッシュは、数学者のペル (Pell) 宛に書いている。「ホッブズ氏は、現在自分の哲学を整理している最中であるとの手紙をくれて、私に希望を抱かせてくれたが、しかし私は、彼が完成するまでにはまだ時間がかかるのではないかと案じている。」また、一六四五年にもこう書いている。「彼の仕事は、日々少しずつ進展してはいるが、とにかく彼にはやるべきことが山ほどあるのだ。」けれども、彼は自然学と形而上学とを『市民論』のように、議論の余地のないほど完璧に仕上げよう

と決意していたので、毎日彼の心を占めていたものは、もっと磨をかけたいという意志であったに違いない。

多忙ではあったが、この期間には楽しいことが沢山あった。彼は、デカルトから知的な面で離れようと本気で考えていたわけではない。というのは、彼は自分の方がデカルトよりも優れていると考えていたし、ソルビエールを始とする、彼に媚び、へつらう追従者達によって新に自信をつけさせられていたからである。ソルビエールはホッブズに対して、デカルトではなく、あなたとガッサンディ (Gassendi) とが時代の大天才ですと言ったのである。オーブリーも、ホッブズとガッサンディとは互いに大層相手に好意を抱いていたと言っている。ガッサンディは一六四六年、ソルビエール宛の手紙の中で、政治理論においてはホッブズよりも深遠な人は他にいないし、一般哲学においてはその透徹さと公正さで、彼に並ぶ者は他にいないと述べている。メルセンヌは、ホッブズが感謝の意を表明したほど彼に親切だったし、また、彼は、亡命イギリス人の一団と交際することで元気を回復させることができた。その中にある若い男がいた。彼は、後に有名なサー・ウィリアム・ベティ (Sir William Petty) となった人物であって、彼は、ヴェサリウス (Vesalius) の『解剖学』(Anatomy) をホッブズと一緒に読んだし、ホッブズの光学論文のために図を作製してくれた。

しかしながら、イングランドの上に垂れ籠めていた厚い雲がその影をパリの上に投げかけ、絶望的な亡命者の小さな流が間断のない奔流となった。デヴォンシャー伯爵は闘士ではなかったが、弟のチャールズは、イギリス人貴族としては最初に行動に出た人であった。チャールズ王の凡庸な將軍であったニューカッスル侯は、マーストン・ムーア (Marston Moor) における敗北の後、弟を伴ってハンブルク経由でパリに逃げてきた。彼は、戦争の記憶を科学と神学をめぐる討論の中で忘れようとした。ホッブズが、アルミニウス派に属するジョン・ブラムホール (John Bramhall) 監督と自由意志について討論したのは侯の家においてであった。けれども、亡命者の苦悩が、こうした知的な慰によって容易に癒されるものではなかったし、ホッブズ自身も経済的貧窮に襲われていたようである。

同年、プリンス・オブ・ウェールズ (Prince of Wales) (皇太子) がサン・ジェルマン (St. Germain) にいた彼の母親の所に逃亡してきたが、その結果、彼の運はよい方向に変わった。というのは、彼がプリンスの数学教師に任命されたからである。それは部分的には、かつてプリンスの後見人であったニューカッスル侯の影響によるものと推定することができよう。もっとも、当時彼は、数学に関して大変令名が高かったのであるが。

とはいうものの、彼の立場は余り心地よいものではなかった。この反教皇的な『市民論』の著者は、反アルミニウス派ではないかと疑の目で眺められたし、大いに期待されていたスコットランド人達は、宮廷が公然たる無神論者を受け入れたのにショックを受けたのである。彼は、数学だけを教えるのであって、政治学は教えないと約束しなければならなかったし、一六四七年にソルビエールが無思慮にもホップズをプリンス・オブ・ウェールズの教師であると囃し立てた時も、ソルビエールに手紙を送って抗議した。彼は、自分を定員外の雇外人にすぎないと言っている。彼は王家の正式な一員ではなかったのだ。チャールズ皇太子は、彼の政治論にまつわる不評判を気にするようなことはなかった。もしも、彼が本当に亡命宮廷に所属していたとするならば、イングランドに帰国する望みを抱くことは不可能であったであろう。

こうした状況の中にいたにもかかわらず、彼は、政治理論に関する主著であり、世界の名著の一つに数えられる『リヴァイアサン』(Leviathan)の執筆に取りかかった。この書物を書いた時の彼の執筆方法は、次のようなものであった。沢山散歩をして思索する。その時、杖の頭にペンとインク壺を仕込んでおき、ポケットにはいつもノートブックを携えて、ある考えが閃くとその場でノートに記す。さもないと忘れてしまうからである。予め書物の章節の構成は立ててあるから、その考察がどこに当てはまるかはすぐ分る。このようにして、かの書物は出来上がったのである。『リヴァイアサン』が出版されると、それは論評を惹き起こした。王政復古後、彼の論敵ウォリス(Wallis)は、『リヴァイアサン』はクロムウェル(Cromwell)、或いは誰であろうとも、どんな手段を講じてでも最高位に登ろうとする人を擁護するために書かれたものだと言っている。ウォリスは、前もってクラレンドンから入知恵をされていたのであろう。というのは、クラレンドンは、『リヴァイアサン』はクロムウェルへのずる賢い御機嫌取りのための書物であると述べ、更にこの書物の何枚かの原稿が印刷されている時に、パリでホップズに抗議すると、彼は冗談とも本気ともつかぬ談論の後、クラレンドンに実は自分は帰国したいのだと語ったという次第をウォリスに伝えているからである。けれども、ホップズは極めて正当にも、クロムウェルは一六五一年にはまだ護国卿の地位に就いてはいなかったと指摘している。ともあれ、彼が帰国したかったというのは明らかであると思われる。

実際一六五六年、彼は、『リヴァイアサン』は千人のジェントルマンの心を意識的に新しい体制に服従させようとする目的で構想されたものであると述べたが、この言葉は明らかに亡命宮廷を喜ばせるようなものではなかつ

た。更に王政復古後、ウォリスへの返答の中で、彼は、見出すことのできた唯一の保護に身を委ねた、王党派に属するある人々の行動を擁護している。

しかしながら、『リヴァイアサン』は、彼の本国への帰還を促進するという目的のために書かれたと結論づけることはできない。というのは、既に『市民論』の中で彼は、征服された後は臣民は新しい政府を支持するよう義務づけられると主張していたし、それに、国家における至高の権力は明らかに君主にあるとは決して考えていなかったからである。クラレンドンをあれほど苦々しい思いにさせたのは、ホップズの高説における新しい論点にあったのではなく、王党派の大義が失われてしまったとする仮定にあった。彼が『リヴァイアサン』を書いたのは、己の思想が熟したからであった。けれども、彼が王党派の人々に政治上の忠告を実際に行ったようには見えない。また、この書物の中には、彼のいつもの超エラスタス主義(Ultra-Erastianism)とは両立しない重要なことが述べられている。つまり、ひとたび教会統治の解体が始まると、第一に法王の権力が、第二に司教の権力が、第三に長老の権力が解体して、原始キリスト教徒の自立性に引き戻されてしまうが、おそらくそれが最善かもしれないというのである。

彼自身によると、イングランドへ舞戻らせたのは亡命宮廷の冷淡さによるのではなく、フランス人聖職者の邪推によるという。『リヴァイアサン』に見られる教皇政治への侮辱は、ローマ教会をしてしばらくの間、教皇権制限主義者たるガリカニズム(Gallicanism)の存在を忘れさせたし、フロンド党(Fronde)の存在は、フランス政府をして成功した反乱に好意を示していると思われたホップズに用心するようになった、ということを我々は考慮しなければならない。

こうして荒天の中、海賊や略奪者に襲われる危険を冒して、彼はイングランドに帰ってきた。そして、再びイングランドを離れることはなかったのである。王党派の人々は、彼がロンドンで大歓迎を受けたという噂を聞いた。クロムウェルが彼に書記の職を提供したという後の噂については、なんら証拠がない。後になって、多くの人々が彼について様々に語ったが、彼が帰国した当時は、ホップズの政治原理が乱れた国土に平和をもたらすであろうという期待があったのである。けれども、『リヴァイアサン』の最後の方の箇所ですべて述べられているように、彼は中断されていた自然の物体についての研究に戻ろうと希望していたのであって、最初はロンドンで、後には(一六五三年)デルヴィシャー(Derbyshire)における彼のパトロンの館で思索を開始した。

### 3. 学問のための闘争

彼には思索するための時間的余裕はあったが、ただ静穩裡に日を送ったとは言えない。『リヴァイアサン』から迸り出た水は嵐を呼んで、それは彼の生涯を通じて治まることはなかった。

一六五四年、ホップズの徒ジョン・デイヴィズ (John Davys) なる者が、パリにおける自由意志に関する討論の際に、ブラムホールに反論したホップズの論文 (それは公表を意図されてはいなかった) の原稿の写を手に入れて、無遠慮にもひどく挑発的な序文をつけて出版してしまった。その序文の中で聖職者達は無知な鋤掛屋に譬えられていて、彼らは良心の中に見出した穴を修繕しようとしてかえって、益々穴の数を増加させているとからかわれている。この書物は、彼の他の書物がそうであったように広く読まれた。意地の悪い言葉やその出版事情の故に、ブラムホールは長ったらしい反駁書を記し、ホップズの議論の一つ一つを否定した。ホップズの方も相当量の返答書を認めたが、そこにはブラムホール監督の返答が印刷されていて、その一つ一つに対して長くて愉快な批評が加えられていた。彼も堪忍袋の緒が切れたのであった。ワード (Ward) を始とする彼への復讐者達は、自分の主人を喜ばせるために小犬のように吠え続けたが、そのうちの一人がブラムホールだったのだ。そこで彼は、遂に彼らを懲らしめるために、この監督を槍玉にあげる必要があると判断したのであった。しかし、小犬達 (勿論彼らは血統書つきの監督制度擁護論者 (Episcopalians) であったが) は、彼が墓に葬られるまで、いや、更に葬られてからも吠え続けるのであった。ある者達は巨大な犬となって吠えた。つまり、一六五五年『物体論』が出版された時、口汚く罵るような輩が噛みついてきたのである。

彼は、最初からひどく苦しめられた。一六五六年一月、彼はソルビエール宛に、イングランドの全教会人が自分に敵対的な態度を取っていると書いている。その翌年、彼は、真理の王国はこの世には存在しないと書いているし、更に六年後には、幾分元気に、後世は自分の味方になるであろうと書いている。

王政復古が実現されると、ホップズの危惧の念は急速に解消した。オーブリーは次のように報告している。「陛下のめでたき選御から二、三日たった頃、当時ホップズ氏が身を寄せていた貴族の住んでいたリトル・ソールズベリー館 (Little Salisbury House) の門前に氏が立っていた時、たまたま陛下が Strand 街をお通りになった。陛下は彼に目を止めて優しく帽子をとり、近況をお尋ねになった。」それ以後、チャールズは彼のごく親しい友人

となった。そして、彼の才知を喜び、百ポンドの年金を与えた。この年金は不定期に、しかも常に満額とは限らなかったが、ともかく支払われた。また、国王は、彼の長期議会の歴史を扱った挑発的な書『ビヘモス』 (Behemoth) の公表を禁止した時、この老哲学者の主張を研究した。

ここで、ソルビエールの証言を紹介するのが適当であろう。ある口さがない科学者グループに属する一員が、一六五三年にイングランドを訪れ、その時の体験を小冊子の中で語っている。彼は、彼とホップズとの関係を知っているチャールズ二世に謁見したが、その時の会見の様態を次のように記録している。「陛下は、クーバー (Cooper) の手によって描かれたホップズの肖像画を見せて下さったが、それは他の科学上の珍奇な品々と一緒に壁に掛けてあった。陛下は、私が彼の人となりを知っているかどうか、また、彼のことをどう思っているかをお尋ねになった。私はその場にふさわしい答をしておいた。そして我々は、もしも彼があれほど教条的でなかったならば、王立科学協会 (Royal Society) にとって不可欠の人となっていたであろうという点で意見が一致した。というのは、彼ほど入念にものごとを精査する人は、他にほとんどいないからである。彼は、イングランドの聖職者の間に恐慌を惹き起こしたが、それをどのようにして行ったかについては、オックスフォードの数学者やその追隨者に対してどのようにして行ったかについてと同様に、私は何も知らない。陛下は、極めて適切にも、彼を犬の訓練のために犬から始められる相手役としての熊に譬えられた。」

一つの事例を除いて、彼が干渉されたり、脅やかされたりするという事はなかった。その例外事とは一六六六年の庶民院の決議であって、庶民院は、将来大火ないしは大疫病が発生するのを未然に防ぐために、彼とトーマス・ホワイト (Thomas White) がそれぞれ書いた、瀆神的で無神論的な著作の審査を命じたのである。けれども、そこからは何も起こらなかった。彼は、どう見ても自分は異端者であるはずはないということを証明するために短い論文を書いている。

更に、彼は比較的、支持者に恵まれていた。国王の寵愛は、彼のパトロン達の好意と結びついて、彼に対するあらゆる監督権を掌握していた論争家の鋭いペン先から彼を守ってくれる格好の避難所となった。キャヴェンディッシュ伯爵は、彼を愛し、尊敬していた。ケネット監督 (Bishop Kennet) は、伯爵が全生涯を通じて、彼を友人としてよりもむしろ、自分の昔の家庭教師として家族の中でもてなしていたと言っている。伯爵は、彼を館の中で気ままに生活させたし、また、何か公の事柄とか或いは家庭内の事柄とかに彼を使わないで、彼のしたい

ように生活させた。伯爵は、しばしば、彼の政治と宗教に関する原理のいくつかに対して大なる嫌悪を表明したものだだったが、公然と彼の名を挙げて批評するのは避けた。彼にはユーモアがあるし、しかも彼をやっつけることができる人物はどこにもいないと言ったものだった。

ところで、『リヴァイアサン』の増刷が、出版認可者(たいていは監督たる司祭か、或いは王立科学協会のメンバーか、或いはオックスフォード大学のメンバーが就任することになっていた)によって禁止されるという事態が起った。一六六八年、この書物の値段は、三〇シリングに上っていた。一六七〇年、書籍出版業組合長は護衛を伴ってやってきて、その時印刷中であった『リヴァイアサン』の原稿を没収してしまった。ホッブズは、細部を多少変更したラテン語訳を書いたが、それをアムステルダムで出版しなければならなかった。このラテン語版の終に近い箇所では、クロムウェルの独裁政治に対する民主主義者の屈伏から学ぶべき教訓についていくらか述べられているし、元の英語版における「総括と結論」の代に、神学に関する付録がつけられている。ティロットソン(Tillotson)という人は、友人宛の手紙の中で、「いくつかの箇所にはごまかしてやろうという意図が見えるし、大部分の箇所はまことに馬鹿げている」とこのラテン語版を酷評している。

このような苛には、「熊」は堪えることができた。けれども、一六六九年に次のような話を聞いた時には、もっと不愉快な気分になった。評判の悪いダニエル・スカージル(Daniel Scargil)という男が、大学の特別研究員の職から解任されるや、自分の誤った方法はホッブズの原理に従ったことによるものであり、この老いたる哲学者は常日頃、自分の正義と寛容を自慢していたと、ケンブリッジ大学当局者を思想教導した。その結果、彼はクラレンドンによって許された。また、ホッブズの悪口を言う他のほとんどすべての人々が、生涯を醜聞なしに送った廉潔な人間として認められた。

更にもっと腹立たしかったのは、科学者と新しく設立された王立科学協会の態度であった。同時代のある歴史家によると、協会は種々雑多な人々の集まりであって、デヴォンシャー、オーブリー、ピービス(Pepys)、エヴェリン(Evelyn)といった人々さえも特別会員であった。それ故、会員から除外されているのは自分に対する侮辱であると、彼の目に映った。彼は、何人かの有能な判定者からは、イングランドにおいて現存せる最大の思想家だと見なされていた。中でもベティは協会の傑出した会員であったが、彼は、ホッブズを古典時代のヨーロッパ以後における真に偉大な八人の人物の一人に格付けしていた。ホッブズは、依然として長期にわたって名譽ある

地位を占めてきたパリにおける科学者のサークルと活発に文通を交わしていたし、王家からは愛顧を賜っていた。彼は、多くの覚え書や証拠を遜って差し出したが、特別会員になることはできなかった。

誰もがその理由を知っていた。協会は国王チャールズによって王立とされたが、実はそれは既に護民官政治の時代に、オックスフォードにおけるウィルキンズ(Wilkins)博士の部屋で発足していたし、それに、ウォリスとウォードがホッブズに敵対していたのである。彼らの論究方法は、自由であると同時に正しく篤信的でもあったから、彼らはホッブズのような人物を仲間として招待する気は全然なかったし、レン(Wren)閣下と宗教心篤いロバート・ボイル(Robert Boyle)、その他の人々も同じ考えをもっていた。彼らは、自分達は研究所を設立しようとしているのであって、大学を設立しようとしているのではないと主張した。それ故彼らは、実際には彼の数学論文を論ずるということを行ってもよいはずだったのにもかかわらず、それをしないで、一般原則として彼の考えは実験に裏打されていないとして入会に反対したのである。国王自身は、かつて、協会が置かれていたグresham・カレッジ(Gresham College)は空気の目方を量ったり、何もしないで時間を空費しているだけだとしてひどく嘲笑したことがあったが、今回は、その時のように彼らを笑い物にすることによってその態度を改めさせるということではできなかった。

ホッブズは、協会に対してそのやり方を変更するように忠告した。彼は次のように言っている。海外から新しい機械とか他のハイカラな品をもたらす人々が皆、哲学者であるというわけにはいかない。なぜならば、もしもそのように評価するならば、薬剤師や庭師のみならず他の多くの種類の職人も哲学者の称号を受ける候補者になることができるし、また、実際に称号を得ることになるからである。そこで、私がグresham・カレッジの紳士諸君が運動に関する学説を研究する場に立合って(彼は既にその研究を行っていて、自然は運動によってのみ事を行うことを知っていたから、もしも彼らが望むならば、かつ、彼を丁重に遇する限り、援助する用意があった)、彼らが、自ら取った記録から自然の出来事の原因を知るように世話をしてあげたい、と。更に、真空と空気の性質に関して、彼はボイルと激しい論戦に入った。

要するに、多くの友人がいたにもかかわらず、彼は孤独な闘士であって、敵から強情で、気難しい人だと思われていた。ところが本人は、大陸における己の声望は難攻不落であると考えていたから、それが励になっていたのである。彼の名声は、海を越えた大陸においては消えていなかった。彼を描いた肖像画はフランスで大変な評判になり、それを見ようとして、美術品収集家達がソル

ビエールの家に押しかけてきたということである。実際彼は、イングランドの哲学者のうちで最も立派な顔をしていた。もっとも、彼は、自分の叡智の評判が髭の刈り方から生まれるのをいさぎよしとせず、唇の下に少し残した以外は、他はすっかり剃っていた。外国からの紳士達もロンドンにやってきた時には、彼を訪問するのを主要な仕事の一つにしていた。そのうちの一人、トスカナ大公コジモ・ド・メディチ (Cosmo de Medici) は、彼の肖像画を携えて帰国し、私室に所蔵していた。

ここで、王政復古初期の頃におけるホップズについての記事を引用することにしよう。一つは、ボイルの友人フック (Hooke) のものであり、もう一つは、数学者ペル (Pell) のものである。

一六六三年、フックはボイル宛に書いている。「私がリーブ (Reeve) 氏の所でホップズに会った時の様子を、もっと早くあなたにお話すればよかったと思います。彼は眼鏡を選ぶのを手助けするために、私の主人デヴォンシャー伯爵と一緒にやってきました。その老人が私に何も言わないで、ただじろじろと私を眺めてあらゆる方面から探っているのを見て、正直言って最初、少し驚きました。けれども、私の主人がこの老人をホップズ氏と呼ぶのを聞いた時、私は驚きを振りました。というのは、私が誰であるか、彼は事前に知らされていたに違いないと思ったからです。私はその場にちょっといただけですが、すぐに、なるほど以前聞いていた彼の性格についての話は当たっているなと思いました。彼は、非常に断定的な調子で語りますし、他の人々の意見と判断を過小評価するのです。また、自らの主張をどこまでも擁護しますし、自分の能力と功績をととても自慢するのです。」

ペルの報告は、ずっと落ち着いた調子で語られている。「今朝、ストランド街でホップズ氏に会いましたが、彼は私をソールズベリーハウスへ連れて行って私室に招き入れ、そこで、立方体の倍積問題 (与えられた立方体の二倍の体積を有する立方体を作る問題) の解答を発見したと言って、その作図を見せてくれました。次いで、彼は、ヴィスカウント・ブラウンカー (Viscount Brouncker) が反論を書き寄ってきたと言いました。更に彼は、自分は証明と図解を書き上げているので、それを明日印刷屋に送るつもりであるし、また、海の向うの数学者に批評を依頼するために、次の機会に印刷の写を送るつもりであると言いました。私は、今、忙しいし、それに暇を見つけて自室で徹底的に考察する前に、あなたに何か質問を発するなどということは到底できない相談だと答えました。すると彼は、私に二枚の原稿を渡して、好きなだけ時間をかけてもよろしいと言いました。そこで私は、もしもあなたの仕事が真実だと分ったら、安んじてそのことを世界に知らせますが、誤っていることが分ったら、

そのことをあなたに知らせても不平は言わないでしょうね。私としては、あなたが、ただ個人的に私の意見を求められたにすぎないものと理解しておりますと告げました。それに対して、彼は次のように懇願しました。あなたに不平を言うつもりはないし、感謝するよ。だが、どうかお願いだ。私の証明に反駁を加えるような真似はしないでくれ。証明に誤があったら、その箇所を教えてくださいなまえ、と。」

#### 4. 衰えぬ学問への情熱

自らの政治学、神学、更には数学と自然学を擁護し続けてきたホップズは、齢九〇を数えるに到った。しびれた指は、依然として鋭敏に活動する強靱な精神の命令に従って不器用に動き続けた。彼の晩年の著作の一つに『ビヒモス』がある。これは長期議会の歴史に関する書物であり、そこでは教訓に満ちた話が語られていて、彼に不滅の名声をもたらすことになった。この不撓不屈の老紳士は、若い頃に長い間自ら禁じていた衝動が迸り出て、八〇歳の翁としては驚くべきことに、『イリアッド』(Iliad) と『オディセイ』(Odyssey) の完璧な韻律の英訳を行った。その序文には、英雄詩の価値についてのエッセイがつけられているが、それは次のような愉快な言葉で終わっている。「なぜ私は書いたのか。他に何もすることがなかったからだ。なぜ出版したのか。これらの著作が、私のもっと重要な著作を論ずるに際して露呈させている私の敵共の愚さから彼らを救って、彼らが自らの叡智を示すことができるように、私の訳詩を攻撃させようと仕向けたかったからである。だが、なぜ注釈をつけなかったのか。既にオジルビー (Ogilby) 氏によってなされているほどには、上手にできないと思ったからだ。」彼の敵も、彼の詩心に賛辞を送っている。

九〇歳になっても、彼は対話篇『Decameron Physiologicum』を著わしている。その結びの言葉は次の通りである。「神よ、我々人間が互いに相手に行っていることをお許し下さいますように。けれども、円周弧に等しい直線についての証明を、どうかお忘れなく受入れて下さいますように。」

八四歳の時、彼はラテン語の対句を用いて生々とした自伝を世に送った。ところが、事前には出版業者ウッド (Wood) に散文からなる自伝を与えていたために、このことが後に苦みの種を播くことになってしまった。クライスト・チャーチの首席司祭 (Dean of Christ Church) であったジョン・フェル (John Fell) 博士は、ウッドの事業に多大の財政援助をしていたし、また、現存作家達のラテン語の用法がアカデミックな装を擬らしているかどうかを監督していた。そのために、権力を恣にする

ことができたから、彼はホップズのある作品中のいくつかの章句を削除したり、文章に変更を加えたりした。彼はホップズの『市民論』は、騒擾を惹き起こそうと企まれた書物だと仄めかしている。ウッドによると、ホップズは気を悪くし、国王に苦情を申し立て、その結果、この問題についての書簡を印刷することを許された。しかし、この書簡に対しては、フェル博士は口汚なく返答してきただけであった。

彼の健康は、中年の頃からよい方に向ったが、彼は種々の病気を抱え込んでいて、そのうちのいくつかは重かった。一六四六年、彼は死の淵にあったが、メルセンヌがローマ教会の行うことのできる役目とは何かという微妙な問題をもちかけた時には、会話に注意を集中した。その後間もなく、彼は英国教会の秘蹟を受けた。一六五一年、パリの有名な医者、彼が放血されるのを嫌がっているのを見て、彼は自殺しようとしているのではないかと考えたほどである。けれども既に見たように、当時彼が陥っていた憂鬱には、他にいくつかの理由があったのである。オーブリーによると、彼は一六六八年頃、重い病気に罹って死にそうであったという。

軽い病気が積もり始めた。一六五〇年以後、彼の両手は麻痺して震がきたために、手で字が書けなくなってしまった。彼はソルビエールに、六〇歳このかた脇腹は痛むし、歩調はしっかりしなくなってしまったと愚痴を言っている。もっともオーブリーによると、彼は背を真直ぐにして歩いていたという。むしろその高年齢にしては、とても背を真直ぐにして歩いていたという。彼は、自らの哲学的原理に基づいて工夫した治療方法によって長寿を得ようと努めた。彼の理論によると、老人というのは、自分の体内における水分のために溺れて死ぬのだというのである。彼が行った主な治療方法は、多量に汗を流すということであった。そこで彼は、日課として朝、散歩をし(朝、散歩をして、その途中で思いついた考を午後文章にするというのが彼の習慣だった)、その後、体を擦って貰った。七五歳頃、頻繁ではなかったが、彼はテニスをし、その後、体をよく擦って貰った。また、彼はとても暖かい衣服を着ていた。

肺に空気を送ることも、彼の養生法の一つであった。誰にも聞かれないように戸をしっかり閉じてから、健康のために大きな声で歌った。六〇歳以後は、食事が度を越さないように注意した。ワインは全然飲まなかったし、肉よりも魚を好んで食べた。実を言えば食事に関しては、彼は生涯を通じて度を越えるということにはなかった。毎日、ワインを飲めるだけ飲むというようなことはなかったし、彼自らの計算によっても、度を過ぎたのは一生のうちで百回ほどにすぎない。このようにして、調子のよい胃が頭脳の不調を軽減させるようになっていったの

である。ケネット監督によると、彼は一日に十回か十二回タバコを吸ったということであるが、オーブリーによると、一日に一回吸っただけであるという。女性に関しては、彼はいわゆる女嫌ではなかったが、若い頃でさえ節度を心得て女性と付き合った。もっとも、ケネット監督の証言によると、彼には私生児の娘が一人いたということである。

彼の生涯は、勉強、沈黙思考、著作活動で忙しかったが、読書の方はそれほどでもなかった。クラレンドンは、他の人々と同じように、彼が余りにも僅かの作家からしか意見を聞かなかったことと、余りにも僅かの書物しか利用しなかったことに遺憾の意を表している。前者は、彼がもっと頻繁に自分に匹敵する知力の持主達と議論すべきであったという非難であるが、それは当を得ているとは言えない。後者は、おそらく、もしも他の人々と同じ量だけ読書したならば、自分はそれらの人々と同じくらいしか知ることができなかったであろう、と自慢して言った彼の言葉を顔面通りに受取ったことからなされた非難にすぎないであろう。けれども古典を除いて、彼は、学問のための学問にはほとんど関心をもっていなかった。なぜならば、彼は、自分は新しい世界に属していると考えていたし、スアレス (Suarez) やブラムホールといった人々の学問は、彼らの知力を活動することができないように窒息させていると考えたからである。彼の学問は、論敵に対して鋭い弁証法的攻撃を行うために用いられた。それは、自由意志に関してルター (Luther) やカルヴァン (Calvin) に言及している際に見られるように、先程その名を挙げた作家達の一般的立場とは、ほとんど何の関係もないほど新しいものであった。

ジェイムズ・ウェルドン (James Wheldon) は、デヴォンシャー伯爵の召使であり、ホップズの遺言執行人であったが、彼はオーブリーに哲学者の最後の病気について詳しく説明している。それによると、ホップズは実質的には病気のせいによってではなく、むしろ生命の燃料の不足のために、一六七九年一月四日に亡くなったということである。もっとも、それ以前に二か月にわたって尿通困難があったし、亡くなる前の一週間は体の右半身は中風に冒されて感覚がなく、そのために、話すこともできなかったということである。ある非常に蓋然性の高い逸話によると、かつて彼は、墓碑銘としては「ここに真の哲学者の墓石がある」とすべきだと提案を喜んだということである。また、別の逸話によると、彼は、九一年間この世から出ていく穴を見つけようとしてきたが、到頭それを見つけた、と死の床で言ったということである。サウスウェル (Southwell) は、アイルランドのオルモンド (Ormonde) 宛の手紙の中で、ホップズはこれの上なく立派なクリスチャンの行う形式を整えて死を迎

えたと書いている。彼は、ハードウィック公園に隣接したホルト・ハックナール (Hault Hucknall) 墓地に埋葬された。その墓石には、彼は正しい人であり、その学問の故に本国のみならず外国においても令名が高かった、と記されている。

#### 参 考 文 献

- 1) The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury, now first collected and edited by Sir William Molesworth. Bart.
- 2) John Laird, Hobbes. 1934.
- 3) George Croom Robertson, Hobbes. 1886.
- 4) D.D. Raphael, Hobbes—morals and politics, 1977.
- 5) Samuel I. Minz, The Hunting of Leviathan, 1962.
- 6) Ferdinand Tönnies, Hobbes-Leben und Lehre, 1896.
- 7) Aubrey's Brief Lives, 邦訳, オーブリー『名士小伝』(富山房百科文庫).
- 8) 邦訳, ホッブズ『リヴァイアサン』, 解説, (世界の大思想 13, 河出書房).